

語用論・文化論的「笑い」の日米比較*

—講義・研究ノートより—

根本 貴行

1. はじめに

笑いとは感情を高度に発達させた霊長類がもつ表現形式の一つである。井上他（1997）によれば、くすぐることでチンパンジーも笑うことがあり、さらには笑う感覚を覚えたチンパンジーは、個体同士でくすぐりあうことがあるということが観察されている。笑いそのものの生物学的根拠や目的、効用などについての考察に関しては井上他（1997）を参照されたい。ひとの笑いには、くすぐるという触角による感覚だけではなく、共同体の維持や人間関係の構築などといったコミュニケーションや社会的な意味をもった、より高度な目的が含まれると考えられる。

本稿では、言葉によるコミュニケーションで生じる笑いについて、語用論と文化論の視点から論じたい。語用論の観点からは、大島（2006）などが主張しているユーモアの不調和理論をもとに、Grice（1975）による協調の原則の中で発話者側の傾向を概観し、また、Sperber and Wilson（1995）による関連性理論において聞き手側の解釈の傾向からどのように笑いが説明されるかを見ていく。日本とアメリカにおけるそれぞれの笑いの例を観察することで、言葉による笑いが生じる普遍的な構造を探っていく。一方、文化論的な観点においては、アメリカに見られるような低コンテクスト社会の特徴と、日本を含むアジアに見られる高コンテクスト社会の特徴が動機となり（Richard 2003、大島2006他）、それぞれの社会における笑いの特徴が説明されることを考察していく。もちろん、日常のユー

モアや芸能人によるコントなどエンターテインメント上の笑いや、笑うこと（笑わせること）を目的とした笑いには日米で共通する側面が見られるが、アメリカンジョークやアメリカンユーモアといったようにジャンルとして確立した笑いがアメリカにみられるばかりでなく、笑いが一定の地位を持っている。一方で、日本ではコミュニケーションの中で笑いがそれほど高い地位を持っていない点に注目していきたい。

本論で論じる通り、アメリカのようなヨコ社会では笑いが人間関係を構築するために大切なストラテジーとして機能する。また低コンテクスト社会という状況下のため、個人間で共有される情報が少なく、笑いはよりジェネラルな内容によって展開され、オチ（パンチライン）はコンテクストの中で論理的に導かれる傾向がある。さらに、アメリカンユーモアやジョークの中には、比喩表現があまり観察されることがないことに気づく。低コンテクスト社会における笑いでは、コアな共有体験の中で笑いを生じさせるといった傾向から、比喩表現があまり用いられないのではないかということ論じていく。

2. 「笑い」の構造

Grice (1975) による協調の原理は、コミュニケーションの参加者はともに協調しあい、さらに話し手は発話の際、量・質・関係性・作法の公理を守る事が期待される。また、Sperber and Wilson (1995) による関連性理論は、人の認知システムに言及し、認知系によって発話が解釈されるメカニズムの解明を目的としている。Griceによる協調の原則が発話者に対する制約を述べる一方で、Sperber and Wilson (1995) による関連性理論は聞き手側の発話解釈の傾向を述べていると理解できる（田窪他、1999）。本節では、協調の原理の立場から笑いがどのような構造で述べられ関連性理論の立場から、聞き手側がどのように笑いを受け取り解釈するかについて見ていく。

2.1 協調の原則における「笑い」

言葉によるコミュニケーションでは、話し手側における思考のコード化と聞き手側のコード解釈により行われる明示的な発話解釈のほかに、話し手の発話意図や推意の推測を必要とする語用論的解釈が行われている。

(1) A: Shall we have lunch?

B: Mary hasn't come yet.

(1)の例では、Aの発話に対するBの応答は明示的には正しいものとなっていないが、Bの発話意図を推意することで、適切なコミュニケーションとなる。Grice (1975)によれば、概略、会話のやり取りは会話に参加する者同士の協調作業としておこなわれることが期待され、発話に対して以下の四つの公理が課される。

(2) 量の公理：適切な情報量を提供せよ

質の公理：偽だと思いを言わないこと

関係の公理：関係のあることを言うこと

作法の公理：曖昧でなく、簡潔に述べよ

この公理を用いると、(1)の例におけるBの応答は次のように推意することができる。すなわち、Bの応答はAとの協調作業の中で行われており、Aの質問に対して適切で偽りでなく、関係のあることが簡潔に述べられていることが期待される。もしBが明示的な意味だけを述べているとすれば、Bの発話はランチへの誘いに対してメアリーに関する出来事について応えており、(2)の関係の公理に違反し会話は成り立たない。会話に参加する者の協調作業が保障されれば、Bはメアリーとランチをとりたいという発話意図を得ることができ、(2)の公理に叶うものとなる。その結果、Aの誘いを断る意図を述べているという推意を得ることとなる。

笑いも会話の中で行われるとすれば、会話の参加者間の協調作業で行われ、笑いを発話する側が(2)の公理に従うこととなる。もし(2)の公理が守られなければ会話は成立せず笑いも生じない。ただし、笑いは通常の会話と異なり、(2)の公理、特に関係性の公理を最大限に活用し運用することで生じると考えたい。大島(2006)では笑いの不調和理論を提唱し、(2)の公理がユーモアの中でどのように生かされているかを落語の例を用いて考察している。会話やストーリー展開の中で次に述べられると期待される事柄から逸脱することで笑いが生じると述べている。また、井上他(1997)においても意外性の中に笑いが生まれると述べており、大島(2006)と軌を一にしている。

ここで英語の例を用いてGriceによる協調の原則において笑いが生じるメカニズムを見てみたい。

(3) Wife: One word from you and I'm going to my mother.

Husband: Taxi!

石川(1999)

通常のコミュニケーションとして(3)が述べられた場合は、夫にとっては偽ではなく正しいことを簡潔に述べており、夫の一言は妻の要求に応じたもので会話として成立する。しかし、もし(3)が一人のストーリーテラーによって発せられたユーモアであるとするれば、夫の発話は妻からの最後の一言という要求に関係を持たせつつ、「一言」という関係性を最大限に拡大することで笑いを誘発していることとなる。不調和や意外性とは、関係性の公理における関係性の拡大を意味すると解釈することができよう。

話し手側のメカニズムとしては、協調の原理における関係性の公理の最大の活用とうことが言えるが、この点に関して、田窪他(1999)が指摘するGrice理論の不備と軌を一にする不備を指摘することができる。田窪他(1999)によると、協調の原則における四つの公理では情報量や簡潔性(作法)などの尺度が示されておらず、この点が理論上問題となると述

べている。同様に、話し手（ストーリーテラー）が笑いを誘発させる際に関係性を最大に活用と説明する時、物事が関係するとはどのようなことか、どの程度の関係性が通常で、どのレベルからが笑いの領域なのか、発話意図が推測できない領域とはどこからか、などが説明されなければならない。

2.2 関連性理論における「笑い」

次に聞き手側の視点から笑いを見てみることにしよう。Sperber and Wilson (1995) による関連性理論では、人が持っている認知系の特徴や傾向に言及し、発話が聞き手側によってどのように解釈（推意）されるかということ述べている。概略、人の認知系は関連のある情報に注意を払うようデザインされており、発話者による発話は、発話と同時に聞き手にとって関連のある情報であるということが前提として伝達される。通常のコミュニケーションでは、聞き手は話しかけられると、話し手が自分にとって何か関連のある情報や認知環境の改善に足りる何かを与えてくれるはずだと感じ、自然と話し手の発話に注意を払うようになる。今井 (2001) によると、認知環境の改善とは、新しい情報を獲得したり、不確かな想定が確実なものになったり、誤った想定が放棄されることで改善されたことになる。また、こうした認知環境の改善にあたり、解釈するためにかかる労力が低いほど関連性が高いことになる。発話内容や発話意図への推意に関して、聞き手は解釈にコストがかからない選択肢を自動的に選択することができ、曖昧性を除去しながら発話意図を解釈することが可能となる。

通常のコミュニケーションではなく、キャッチコピーなど特殊なメッセージにおける語用論的推意について、新井 (2006) は、何が言いたいのかを考えさせて注意を引き、コストをかけて発話意図（推意）を推測させることで、直辞的な形式よりもより高い関連性を得ると述べている。次の例を見てみよう。

(4) Neighbor: You have a fine collection of books, but they look so crowded. You really ought to have more shelf space.

Book lover: Yes, I know. But no one lends me any shelves.

(石川1999)

話し手 (book lover) は強調の原理に基づき、neighborの発話に対応し関係のあることを述べている。また、自分は本棚をこれ以上置くことができないというneighborの勧めに対する否定的な推意を推測することができ、会話として自然な形で成り立つ。一方、この対話が一人の話者によって述べられて、聞き手がオチ (パンチライン) を解釈する場合、book loverの発話箇所は「本棚を誰も貸してくれない」というコストをかけず得られる明示的な解釈から、所蔵図書も借りものであるという推意をコストをかけて得ることができ、笑いにつながるより高い関連性が得られることになる。次の例でも笑いが高コスト解釈により生じていることが説明される。

(5) “Your cough seems to be much better this morning,” Dr. Gaines said to his patient.

“I should hope so,” the patient replied, “I’ve been practicing all night.”

Brown (1987)

betterの意味を快復するという意味から上手くなるという意味に広げ、これに合わせてpracticeが解釈される意味領域を広げて、笑いを生み出す結果となっている。通常のコミュニケーション以上のコストをかけることで解釈させ、聞き手にとって笑いにつながるより高い関連性を生じさせることになる。

3 笑いの日米比較

話し手（ストーリーテラー）が聞き手の期待を裏切り、事柄間の関連性を拡大することで笑いが生ずるとすれば、期待の内容により笑いの質や内容が異なるということが予測される。期待の内容は社会や文化、常識、時代などにより異なるため、日米において笑いに関して何らの差異があることが容易に考えられる。

社会的特徴として、アメリカはサラダボウルとかメルティングポットと呼ばれることから、異なる文化背景の共同体からなる低コンテクスト社会であると考えられている。Richard（2003）によれば、低コンテクスト社会の特徴として、次のような点が指摘される。すなわち、低コンテクスト社会では個人は状況や人間関係に左右されず、個人は周囲と切り離された不可侵の存在であり、環境に応じて自己が変化することがない。また、よい話し手であることが期待され、会話では話し手に責任が負わされ、聞き手が理解できるように論理的に発信されなければならない。教育の中では沈黙は良いものとされず、自分の意見を積極的に発信することを教えられる。一方、日本やアジアに見られる高コンテクスト社会は、自己が周囲の環境に依存するものであり、状況依存的な存在である。例えば、自分がおかれた状況により、一人称が変化するのも特徴である。家庭を持った教師である男性は、学校で生徒に対する一人称として「先生」を用い、家庭では「お父さん」、外では「私」や「僕」を使用する。また、高コンテクスト社会では会話の中で聞き手が内容理解の責任を負うこととなり、他者の話を良く聞くようにという教育を受ける。

そもそも低コンテクスト社会は異文化背景をもった共同体の集合であるため、そこで共有される共通概念や常識といったものの範囲が狭いということが言えよう。さらには、話し手（ストーリーテラー）がその発話において内容理解の責任を負うとすれば、狭い共通概念の中で論理的で分かりやすいストーリー展開をすることが期待される。次の例を見てみよう¹。

(6) A: I hear you've signed up skipper on the good ship matrimony.

B: No, my wife I is the skipper. I'm her second mate.

(石川 1999)

(7) A: 再婚したんだって？

B: はい、でもやっぱり難しいですね、結婚生活っていうのは。だから（Aさんは）偉いなと思って。一度で踏みとどまっているじゃないですか。

A: 二度結婚するやつの気がしれないんですよ。阿蘇山の噴火口にハマったら熱いでしょ。そこにまたはまるかっていう・・・

(6)で特徴的なことは比喩が用いられていることである。アメリカンジョークやユーモアを観察する中で、比喩表現がほとんど使われていないことに気がつく。その中でも(6)の例は笑いの中に比喩が使われているわずかな例のうちの一つである。鍋島（2007）によると、比喩（メタファー）とは離れた二つの領域の写像により生ずるものであり、経験的基盤や身体的基盤による共起性が比喩の動機づけとなる。身体的な経験は普遍的に共通する経験になりやすいので、*Anger is fire.* といった比喩表現は広く理解される。しかし既に述べたように、低コンテクスト社会では共通する概念の範囲が狭いこともあり、かつ話し手に会話の責任が及ぶとすれば、笑いの表現方法として比喩表現が回避されることが予測される。(6)では結婚が船出や航海にたとえられているが、航海や船出は英語に限らず日本語でも人生や通過儀礼のたとえとして、「門出」や「旅立ち」といった一般的に見られる表現である。笑は通常のコミュニケーションとは異なり、コストをかけて推意を求められるものの、瞬時の解釈が笑に結びつくものであろう。また、アメリカンジョークやユーモアでは、人間関係構築やアイスブレイカーとしての役割があるとすれば、自由に比喩表現を使えるような共通の経験基盤を求めることは困難であると考えられる。

一方、(7)は日本のトーク番組で離婚経験のあるアンカー役Aが結婚生活を噴火口にたとえていることが特徴である。少なくとも噴火口に足を踏み入れるという非日常的で共有されない経験が結婚に写像されている。これを解釈するのは聞き手の責任であり、ストーリーテラー側にとっては比喩表現を容易に用いることができる環境が高コンテクスト社会にはあると言えよう。

共有される経験基盤が小さいが故に、低コンテクスト社会において笑いにおいて比喩表現の使用頻度が少ないということは、アメリカンジョークやユーモアにおけるパンチライン（オチ）が文脈から容易に導き出せる論理的な構造を呈するということも同様に導かれることになる。すでに述べた通り、ストーリーテラーは語用論的に最大の関係性を用いて、聞き手の期待とは異なることを述べることで笑いが生ずる。聞き手側にとっても、パンチラインをコストをかけて解釈することで通常のコミュニケーションとは異なる効果をもたらされる。以下の例はパンチラインが論理的に導かれる典型的なものである。

(8) I was calling on a friend who had just put up a sign, 'Apartment for Rent. No children.' There was a knock at the door and a serious-looking little boy about five came in. Turning his hat in his small hands, he said with great dignity, "Madam, we saw your sign in the window and I was wondering if it was still vacant." He stopped to swallow hard, then continued. "I haven't any children. There are just me and my aged parents." Looking behind him, we saw a young couple with anxious about hopeful faces. They got the apartment. (石川 1999)

(9) During class, the chemistry professor was demonstrating the properties of various acids. "Now I'm dropping this silver coin

into this glass of acid. Will it dissolve?"

"No, sir," a student called out.

"No?" queried the professor. "Perhaps you can explain why the silver coin won't dissolve."

"Because if it would, you wouldn't drop it in."

(Laughter the Best Medicine)

子供不可の物件に子供が親を同伴で入居したいという論理でのべること
で(8)のパンチラインが述べられており、また、科学的な説明が要求され
期待されるコンテキストの中で、(ケチな)教師の性格が故にコインを投
入できるはずがないと、実験の内容(教師の行動)が論理的に展開される
ところに(9)のパンチラインがある。

4. 社会構造と笑いの特徴

4.1 Richard (2003) 他に見られる社会構造と笑いの関係

日本人にとっての笑いとアメリカ人にとっての笑いは、いくつかの点で異なる。そもそもアメリカにおいては、アメリカンジョークとかアメリカンユーモアとして笑いのジャンルが確立している。一方で、日本では強いて言えば「オヤジギャグ」がアメリカンジョークやアメリカンユーモアに相当すると思われるが、それぞれの文化における笑いの地位はおおよそ異なるものである。アメリカンジョークやユーモアがアメリカ社会の中で相当の地位をもったものであり、既に述べた通り、アメリカでは一家に一冊のアメリカンジョーク集が備えられるほどであるのに対して、オヤジギャグは、状況によってはコミュニケーションを阻害する場合もあり、疎んじられる傾向を見せるものである。少なくとも受講生である女子大学生の間では「オヤジギャグ」の評価はあまり高いものではなさそうである。オヤジによる笑いという観念により「オヤジギャグ」と定着したものであろうが、「オヤジ」という概念にリーダーとか管理者といったプラスイメージはあ

まり感じられない。地位の高い管理者やリーダーであっても、オヤジと呼ばれるとたちまちその立場は失墜し、揶揄されている対象というイメージになる。オヤジギャグはオヤジ同士または少なくとも既に人間関係が構築された後に仲間間で交わされる笑いであるのに対して、アメリカの笑いとは人間関係を構築する際に用いられ、特に組織の管理者やリーダーシップを発揮する際の能力の一つとして考えられている。こうした日米における笑いの違いと、特にアメリカにおける笑いがどのような社会背景により、またその社会背景により笑いがどのような特徴を見せるのかをここで考察してみたい。

既に述べた通り、アメリカは異文化の背景をもった個人の集合体として低コンテクスト社会が形成されている。Richard (2003) は19世紀以降の社会科学において述べられている集団形成のパターンに言及し、家族関係など自然発生的に生じて共有されたものを多く持つ共同体（ゲマインシャフト）と、利益を追求するような意図的に作られた社会（ゲゼルシャフト）について述べている。前者を日本（アジア）的な高コンテクスト社会、後者をアメリカ的な低コンテクスト社会とすることができよう。水谷（1985）によると、いわゆるメルティングポットとかサラダボウルのような異文化が混在した社会というのはアメリカでも都市部に限られ、地方の社会は異文化がそれほど深く交わらずそれぞれの文化背景を持った集団がモザイク的に存在する場合が多いと述べている。しかし、Hall (1959) をはじめとして多くの文化人類学者が述べている通り、文化は伝承され学ばれるものであり、それぞれの文化ではそれぞれの文化が教育や子育ての中で受け継がれ、脈々と実践されるものである。

Richard (2003) は高コンテクスト社会と低コンテクスト社会の特徴に触れ、次のように述べている。低コンテクスト社会であるアメリカでは、個人主義を助長するような教育を通して子供は育てられる。子供は幼いころから両親とは別のベッドで就寝することが常であり、日常的に自分のことは自分で行うことが求められ、なるべく多くの選択肢が与えられ自分で

選択するように促される。また、Richard はアメリカの初級読本の冒頭を引用し、教育においても低コンテキスト社会の特徴と助長していると述べている。初等読本『ディックとジェーン』の冒頭は、「ご覧、ディックが走っている。ご覧、ディックが遊んでいる。ご覧、ディックが走って遊んでいる。」と始まっており、個人の行動が強調されている。自分が主体となり行動を起こし決定権を有するような中で、育つ中で低コンテキスト社会が継承されることとなる。こうした社会では、聞き手の相手に対する推意が高コンテキスト社会ほど期待されず、話し手は聞き手が十分理解できる関係性をもって会話を展開される傾向となる。一方、日本やアジアに見られる高コンテキスト社会では、子供が幼いうちは両親と同じ部屋で就寝し、相手の気持ちを重んじるよう育てられる。「クマさん（クマのぬいぐるみ）が痛まって泣いているよ」など、物の気持ちを用いて物を大切に扱うよう促すことが多い。さらに、中国の初級読本の冒頭が「兄は弟の面倒を見ます。兄は弟を愛しています。弟は兄を愛しています。」という記述で始まっていることを挙げ、高コンテキスト社会では人間関係が強調される教育が施されることを指摘している。このような教育のもとでは、社会の成員は相手の気持ちに注意を払い、聞き手（受信者）として相手のことばを読み取ることに重きを置くような傾向が強くなる。

さらに、井上他（1997）はアメリカのようなヨコ社会と日本のようなタテ社会のそれぞれに見られる社会的な特徴を挙げている。ヨコ社会では個人の能力や努力により人間関係を上げていく商人的な社会であるため、言葉によるコミュニケーションが発達しやすい。笑いは人間関係を構築し広げていかなければならない社会の中で大切なコミュニケーションのツールとしての地位を持つこととなる。一方タテ社会では、組織の中や共同体の中で上司と部下、先輩と後輩、親と子といった上下関係が重んじられる。上に立つ者は威厳を保つことが重要で、笑われることは威厳を失墜させることとなる。恥をかかないよう、また笑われる人にならないよう教えられる。上意下達方式で組織は運営され、言葉によるコミュニケーションはヨ

コ社会ほど発達せず、笑いも社会の中で決して中心的なツールとはならない。

井上他（1997）は、ヨコ社会における笑いは相手との距離を近くにするための協調としての笑いであって、交渉術の一つであると述べている。Sakamoto and Naotuka（1982）においても同様の例が紹介されている。Sakamoto and Naotuka（1982）は、何を丁寧であると感じるかは文化によって異なり、丁寧さは絶対的なものでなく文化によって構築される虚構のようなもの（polite fiction）であると述べている。日米の振る舞いの違いはいくつかのpolite fictionを仮定することで説明される。ヨコ社会のアメリカではお互いが近い存在であるという polite fiction に準じて振る舞うことが丁寧であると考えられている。故にリラックスした状況の中で働けるよう笑いによって雰囲気と和ませるというリーダーの能力が尊重されるようになる。さらにスピーチの際、スピーカーは聴衆との距離を縮めることで丁寧さが表されるため、アイスブレイカーとしての笑いの有無がスピーチの良さを決定する。逆にタテ社会である日本では自分は相手より劣っているという polite fiction に準じて振る舞うことで丁寧さを感じる。仕事の場面では謙虚に振る舞わなければならないし、仕事中に笑ったり和やかにすることは良いこととされない。また、スピーチの際は「このような私がこのような場でお話させていただくとは・・・」と謙遜することから始まることが多い。こうした傾向を見せる社会の中で、組織や人間関係構築といった目的で笑いが用いられることは期待されない。日本では、人間関係が構築され仲間意識が強まった上で笑いが許され、その一つとしてオヤジギャグが成り立つ。アメリカのヨコ社会と異なり、日本では集団への帰属の確認とか帰属意識の強化といった状況で笑いが行われる。いわゆるムラの共同体として高コンテキストの環境でお互いが共有する経験的基盤が多くある中で笑いが行われ、さらに聞き手側に解釈する責任も期待されるため、飛躍したオチや比喩の多用といった日本的な笑いの傾向が説明される²⁾。

4.2 日米における笑いのテーマ

既に述べた通り、笑いの不調和理論や語用論的に笑いが聞き手の期待を裏切ることにより生じるとすれば、文化や社会によって期待の内容は異なる。語用論的に笑いの構造は普遍的であるが、笑いを誘発する（しやすい）ストーリーのテーマや内容に文化的な差異がみられることが想像できる。

- (10) A man needing some legal help walks into a law firm. He asks an attorney: “If I give you \$300 to help answer two legal problems I have, will you help me?”

The attorney replies: “Sure, what's the other question?”

- (11) A man visiting a graveyard saw a tombstone that read: “Here lies John Kelly, a lawyer and an honest man.”

“How about that!” he exclaimed. “They’ve got three people buried in one grave.” (Laughter the Best Medicine)

- (12) Two passengers on the ship are talking. “Can you swim?” asks one. “No,” says the other, “but I can speak nine languages.”

一般的に知られている通り、アメリカ社会では弁護士が揶揄される対象になりやすい。(10)ではアメリカでは弁護士が顧客のことよりも自らの利益を優先していることを揶揄している。また、(11)ではケリーと弁護士、正直者が同一人物を指すという解釈であるにもかかわらず、弁護士が正直者であるという解釈を回避しているという点が笑いを誘発するパンチラインとなるが、弁護士の地位が至極高く評価される社会では(11)のパンチラインは理解されない。さらに、(12)では泳げないかわりに9ヶ国語で助けを呼ぶことができるというパンチラインで笑いを誘発しているが、あまり

外国語に接触しない日本の社会ではあまり想像できないオチである。講義の中で(12)のパンチラインを空欄にして受講者に埋めてもらった結果、「泳げないが飛べる」という発想が最も多く見られ、面白い回答には「泳げないが目は泳ぐ」や「あなたとの恋には溺れない」などがあつた。「目が泳ぐ」や「恋におぼれる」など、日本語のイディオムを用いた笑いで、(12)のパンチラインとは異質な発想であり、日米の発想の違いが感じられる。

最後に次の例を紹介したい。

(13) 会計のとき

東京人 「予算がたりるかなあ」と考える。

大阪人 「割り勘でなんぼになるか」と考える。

名古屋人 お礼の言葉を考える。

(14) On a ship which was about to sink. The captain asked the passengers to go into the water with the safety vests;

To English: Are you a gentleman?

To American: Are you a hero?

To Germany: This is the rule.

To Italian: A beautiful lady went into the sea a little while ago.

To French : Don't swim in the sea.

To Russian: A bottle of vodka spilled.

To Chinese: There are fishes that look very delicious.

To South Korean: Japanese swim over there already.

To Japanese: Everybody does the same.

アメリカンジョーク集には(14)のような民族の特徴を取り上げて笑いを誘発するものが多く見られる。日本でも(13)のように地域性の違いをテー

マにして笑いを展開する例が見られる。ここでも日常で外国と接点が少ない日本ではあまり国際的な民族へのテーマ拡張は困難であり、ドメスティックな内容にとどまることが予測される。ただし、笑いが異質なものを直辞的に述べることを避け、経験の中から推意を推測させ笑いを生み出すという点では日米間で共通している。大阪人ついてであれば、商魂が高くケチであると明示的に言わず、割り勘を前提にするような傾向がるとか、ロシア人は酒好きであると直接的には言わず、ウォッカのために飛び込むといったように婉曲的に異質なものの特徴を述べることでパンチラインが成立している。通常のコミュニケーションよりコストをかけて推意を行わせることで笑いが生じている。

5. まとめと結語

ことばによる笑いは、通常のコミュニケーション以上に明示的な解釈を超えて推意を伴って生じるものである。話し手側の制約である協調の原理と、聞き手側の認知系の傾向を述べた関連性理論を理解するうえでも興味深い現象であると考えられる。本稿では、笑いの生じるメカニズムに普遍性がみられる一方で、社会的文化的な差異に応じた笑いの差が日米間で見られることを述べてきた。アメリカンジョークとかユーモアに相当する相当に評価されている笑いが日本に存在しないことがもっとも顕著な差異ということが言えよう。

文化とは学ばれて継承されるものであり、社会的コンテキストの高低やタテ・ヨコ社会といった特徴は共同体や社会の意図とは無関係に続いている。しかし国際社会の浸透から日本では良い受信者であることが期待される一方で、英語的な発信者としての能力を重視する傾向も近年感じられる。「つかみはOK」というのがかつて流行ったことがあった。エンターテインメント上であってもコミュニケーション上であっても、相手との距離を縮めることに対する潜在的な重要性が明示化されたことが流行のきっかけであったかもしれない。

時代の変化とともに日本でも欧米のような笑いが多くなっていくのか、日常の笑いを注視していきたいと考えている。また、情報化社会の浸透により、情報が広く共有される時代となった。低コンテクストの社会にも何か変化が生じたりしてはいないかという点にも注目してみたい。笑いのパンチラインや比喻表現の有無など、観察しやすいデータを扱うことで、社会構造や文化の変化に気づくこともできるのかもしれない。

最後に、本稿は主に「英語学概論」の授業における語用論を中心とした部分の講義ノートをもとに執筆したものであることを付しておきたい。語用論や認知意味論にまつわるメタファー理論などにおいては、学生の関心は単なる理論に向けられているのではなく、理論が実際の言語活動や人の機能としてどのように具現化されているかという点に向けられるべきである。講義で触れる理論が身近な事象が理論と結びつくことで、抽象的な概念がより説得力をもつものとなると考えている。笑いとは学生にとっても身近なものであり、興味をもちやすい素材である。こうしたことばの現象を扱うことで、言語や文化、社会などといった側面に興味を広げ、ひいては言語研究を始める動機づけとなることを願っている。

参考文献

- 新井恭子 (2006) 「関連性理論における「広告のことば」の分析」、『経営論集第』26号、東洋大学経営学部
- Brown, J. (1987) *1001 Great Jokes, A Signet Book*
- Grice, H, P. (1975) 'Logic and Conversation,' In P. Cole and J.L. Morgan (eds.), *Syntax and Semantics, Vol. III.: Speech act.* Academic Press.
- Hall, E. (1959) *The Silent Language*, Doubleday and Company. (国弘正雄・長井善見・斎藤美津子 (訳)、『沈黙のことば』、南雲堂、1966)
- 今井邦彦 (2001) 『語用論への招待』、大修館書店
- 井上宏他 (1997) 『笑いの研究』、フォーユー出版

石川渉 (1999) 'English without Tears,' 第39回大学英語教育学会全国
大会発表資料

水谷隆夫 (1985) 「海外進出企業でのコミュニケーションについて」、『日
米のコミュニケーション－言語と文化－』、徳川宗賢 (編)、南雲堂

鍋島弘治朗 (2007) 「領域をつなぐものとしての価値的類似性」、『メタ
ファー研究の最前線』、楠見孝 (編)、ひつじ書房

大島希巳江 (2006) 『日本の笑いと世界のユーモア』、世界思想社

尾上圭介 (1999) 『大阪ことば学』、創元社

Reader's Digest (ed.) (2008) *Laughter the Best Medicine*, Reader's
Digest Association. Richar, E. Nisbett. (2003) *How Asians and
Westerners Think Differently...and Why*, The Free Press. (村本由
紀子 (訳)、『木を見る西洋人 森を見る東洋人』、ダイヤモンド社、
2004)

Sakamoto, Nancy. and Reiko Naotuka. (1982) *Polite Fictions*, 金星堂

Sperber, D. and Wilson, D. (1995) *Relevance: Communication and
Cognition*, Second edition. Blackwell.

田窪行則・西山佑司・三藤博・亀山恵・片桐恭弘 (1999) 『談話と文脈』、
岩波書店

* 本稿の執筆にあたり、東京家政大学における「英語学概論」および駒
沢女子大学における「英語学概論」、「英語コミュニケーションゼミ」
での講義が活用されている。受講生からの発言やアンケート結果など
も大いに活用されていることを付しておく。

注

- 1 (6)はアメリカンジョークの例であり、(7)はタレントによる笑の例である。アメリカンジョークが一般的に日常で交わされるものであるのに対して、(7)は非日常的な例と言えよう。故に(6)と(7)は比較対象にすべきではないかもしれないが、笑の中で比喩が使用される例として対照しやすいため挙げたものである。主張したいのは、そもそも日本にはアメリカンジョークに相当する地位をもった笑いが存在しないという点である。当然ながら、アメリカでもタブーを比喩を用いて笑に結び付けるものが存在している。
- 2 アメリカ人に比べて日本人は相手との距離をとらない傾向があるとされているが、尾上（1999）は、大阪人（弁）の面白さは、相手との距離の近さにより生ずると述べている。尾上（1999）は、自動券売機で切符を買った際おつりが多くでてきてしまい困っている女子学生に、見知らぬおじさんが「安う乗んなはれ」と声をかけたという例を出している。アメリカの笑いが人との人間関係構築、すなわち相手との距離を縮める役割を担うとすれば、大阪のこの例も同様なことが言え、相手との距離が笑いにとって一つの動機になることが伺える。